

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚病診療 (1992.07) 14巻7号:615~616.

虫による皮膚病
モンシロドクガ幼虫による皮膚炎

田村俊哉、松尾忍、飯塚一、岸山和敬

■虫による皮膚病-1992<臨床例>⑧

モンシロドクガ幼虫による皮膚炎

田村 俊哉* 松尾 忍* 飯塚 一* 岸山 和敬**

毛虫による皮膚炎はまれな疾患ではなく、北海道北見地方においても夏期に数例は経験する。しかし平成2年夏、モンシロドクガの幼虫による皮膚炎患者が例年に比し多数受診したので報告する。

症例1 63歳，女性。

初診 平成2年7月16日。

家族歴，既往歴 特記すべきことなし。

現病歴 庭木の手入れを行った日の夕方から左上肢，体幹に痒痒を伴う紅色皮疹が多発してきたため北見赤十字病院皮膚科を受診した。庭木には数匹の毛虫がいたという。

現症 左上肢，胸部に小豆大までの鮮紅色，浮腫性の漿液性丘疹が集簇，散在する(図1)。

症例2 10歳，男児。

初診 平成2年7月23日。

家族歴，既往歴 特記すべきことなし。

現病歴 学校で草刈りをした翌日から頸部，体幹，両上肢に痒痒を伴う紅色皮疹が出現してきたため北見赤十字病院皮膚科を受診した。

現症 頸部，体幹，両上肢に症例1と同様の浮腫性漿液性丘疹が多数認められる(図2)。

治療ならびに経過

抗ヒスタミン剤の内服とステロイド外用でいずれも1～2週間で治癒した。

鑑別診断

小児ストロフルス，蕁麻疹様苔癬，接触性皮膚炎などがあげられる。発症の状況，季節および特徴的な発疹から診断は比較的容易と思われるが，皮疹の直接鏡検で毒針毛を確認すると確実である。今回，毛虫皮膚炎が疑われた症例には市内の公園から採取してきた毛虫(図3)をみせ，同じものがいたことを確認した。この毛虫は羽化した幼虫(図3)とともにモンシロドクガと同定した。

考 按

全世界に約2,500種存在するドクガ科昆虫のうち日本では50数種が生息しているが¹⁾，真の毒針毛を有し疫学上問題となるのは *Euproctis* 属の3種，ドクガ *Euproctis subflava* Bremer, チャドクガ *Euproctis pseudoconspersa* Strand, モンシロドクガ *Euproctis similis* Fuessly である²⁾。毒針毛は長さ0.1～0.2mmの釘形で2齢幼虫以降に認められ，齢の経過とともに数が増し，ドクガでは約600万本，チャドクガ，モンシロドクガでは約50万本有する²⁾。成虫には毒針毛群生部はないが，羽化の際に繭内に残存する毒針毛が尾端部を主体に付着するので，成虫によっても皮膚炎がおこる。毒液成分としては，プロテアーゼ，エラスターゼ，キニノゲナーゼ，ホスホリパーゼ A₂ などの酵素類とヒスタミンが同定されている³⁾。

臨床像はドクガ，チャドクガ，モンシロドクガに共通しており，とくに特異的ものはない。久保によると⁴⁾，毒針毛が皮膚に刺入した数分後に点状紅斑が出現し，約30分後に紅色膨疹となり，24～48時間後には小水疱を伴う浮腫性紅斑ないし紅暈を伴う漿液性丘疹となるといふ。

* Tamura, Toshiya Matsuo, Shinobu (助教授)
Iizuka, Hajime (教授)
旭川医科大学皮膚科学教室 (〒078 旭川市西神楽4線5号3-11)

** Kishiyama, Kazunori (部長)
北見赤十字病院皮膚科 (〒090 北見市北6条東2丁目)



図1 症例1. 臨床像



図2 症例2. 臨床像

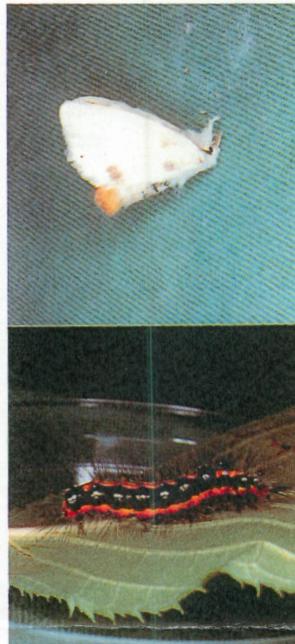


図3 モンシロドクガとその幼虫

一方、モンシロドクガはサクラ、クワ、ウメ、バラ、クヌギ、ツツジなどを食草とし、北海道から九州に至るまで日本各地に広く分布しているが異常発生はあまりなく、それによる毛虫皮膚炎も養蚕地帯以外ではまれとされている。今回、北見地方において小規模であるが群発したことは興味深い現象である。月別では、6月7例、7月29例、8月12例、9月2例、10月1例と7月にもっとも多く認められた。男女比は1.8:1で男に多いが40歳以上では性差はなかった。年齢別では10歳未満と60歳代に2峰性のピークがあり、野外で遊ぶ機会の多い小児と庭木をいじることの多い世代に多発する傾向がみられた。大きな発生をみなかったのはモンシロドクガの毒針毛がドクガに比し少ないためかもしれない。

毛虫が越冬する平成1年11月から平成2年4月の月別平均気温を調べたところ、平年より0.4~4.1℃高く、ドクガの異常発生の理由の1つに暖冬の影響があったと考えられる。

本論文の要旨は日本皮膚科学会第297回北海道地方会および第91回日本皮膚科学会総会にて報告した。

ドクガ *Euproctis subflava* Bremer は異常発生することが知られている。北海道においてもそれによる皮膚炎患者の多発が、1)1956年、千歳周辺の駐留軍と自衛隊員を中心とした被害、2)1964~65年、松前町をはじめとする道南地方の児童を中心とする被害、3)1974年、道南・道央の国鉄沿線の保線区作業員への被害として報告されている⁵⁾。

<文 献>

- 1) 江崎悌三ほか：原色日本蛾類図鑑，下巻，保育社，大阪，p.21，1971
- 2) 川本文彦，滝野長平：現代皮膚科学体系8，中山書店，東京，p.248，1984
- 3) 川本文彦：衛生動物 29：175，1978
- 4) 久保容二郎ほか：臨床 44：189，1990
- 5) 高島 巖，岸山和敬：交通医学 29：32，1975